

# 平塚らいてうのロマンチック・ラブと 近代家族に関する思想と実践にみる葛藤とゆらぎ —— 1890 から 1910 年代を中心に ——

桑原 桃音\*

## Conflicts and ambiguities in Raicho Hiratsuka's thoughts and practices about romantic love and modern family

Momone KUWABARA\*

This paper aims to describe Raicho Hiratsuka's thoughts and practices about 'romantic love' and 'modern family' from a comparative perspective with Raden Adjeng Kartini's, which are dealt with in Aoki's paper. Hiratsuka was regarded as Japanese 'New Woman' in the global current of woman's movement from the late 19<sup>th</sup> to the early 20<sup>th</sup> century. Her thoughts and practices were strongly influenced not only by the global current but also by Zen Buddhism. While Kartini died young, she lived a long life, in which her thoughts changed to a great extent.

This paper considers her conflicts and ambiguities. She regarded the 'unification of subject-and-object' in Zen most important in her early twenties, especially when she together with Morita Souhei attempted a double suicide, which was reported as 'Shiobara case'. In her later years, however, she incorporated Ellen Key's philosophy and came to emphasize the importance of woman's subjectivity. Under the influence of these two, sometimes conflicting, philosophies, she practices a de facto marriage and formed an eclectic Japanese-style modern family.

### はじめに

本稿の目的は、日本の「新しい女」である平塚らいてう（本名明 [はる]）の、ロマンチック・ラブと近代家族に関する思想と実践、とくにそこにあらわれた葛藤、ゆらぎを素描することである。

平塚に対する今日の一般的なイメージは、女性による最初の文芸雑誌『青鞥』の創刊の辞「元始、女性は太陽であった」（以下「元始」）を著した女性解放運動家というものだろう。実際に平塚は女性解放思想に通じるロマンチック・ラブおよび近代家族の理想を受け入れ、実践しようとしていた<sup>1)</sup>。平塚は1886（明治19）年2月10日、東京市麹町区で生まれ、明治の閉幕が翌年に迫った1911（明治44）年に25歳で「元始」を書いている。そして、日本の女性解放運動の源流であった彼女は、その発展に寄与する旗頭というイメージであり続けたまま、1971（昭和46）年5月24日に胆道癌のため85歳で永眠する。しかし、本稿は平塚の女性解放運動の軌跡を主題とするのではなく、平塚が近代日本におけるロマンチック・ラブと近代家族の萌芽のなかで、いかに模索と抵抗

---

\* 龍谷大学社会学部実習助手

をしていたのか、その時系列的な変容においてどのように葛藤し、ゆらいでいたのかを考察することにある。

結論を先取りするならば、平塚が影響を受けたのは近代的で西洋的な女性解放思想だけではなかった。そして、彼女のロマンチック・ラブと家族の思想や実践は一辺倒なものではなかった。時代状況やライフステージの変化にともない、模索と抵抗するなかで、その思想や実践には葛藤やゆらぎが生じていた。また、平塚がロマンチック・ラブや近代家族に関する思想を言及しはじめる時期は、「西洋」-「日本」、「近代」-「伝統」が微妙に混在し合う時期であった。本稿では、この近代日本の過渡的時期である1890年代から1910年代頃に著された平塚の著書、自伝『元始、女性は太陽であった』におけるこの時期の回想、また平塚に関連する文献などを基本的なデータとする。これらの資料から、平塚のロマンチック・ラブと家族に関する思想や実践が、いかに葛藤しゆらいでいたのか、そして、同時に、いかなる契機によってそれらが生じていたのかを素描していく<sup>2)</sup>。そうすることにより、「日本」と「西洋」、「伝統」と「近代」が交錯するところで紡ぎ出される、当時の社会の恋愛・結婚・家族のあり方の変容や融和の一端を提示したい。

また、本稿でいう「葛藤」とは新旧、和洋などさまざまな価値観が互いにぶつかりあう状況や思想を、「ゆらぎ/ゆれ」とは、ある思想や理念がある機会にそれと異なる、もしくはそれに反する思想や理念に転換すること、あるいは転換後、思想や理念を揺れ戻すことも指す。

平塚に関する論考は、ここでは取り上げきれないほどたくさんのものである。そのなかでも、近代日本の過渡期における平塚の葛藤やゆらぎを論じた論考としては、平塚の近代的思想と日本的な禅による思想の相克を論じたもの(井手1987;佐々木1994)、「父との葛藤」や「デモクラシーとジェンダーの葛藤」を論じているもの(米田2002)などがある。これらの優れた論考では、平塚の心中未遂事件、初体験、『青鞥』社員との同性愛、奥村博史との事実婚に関する思想と実践について触れられている。本稿ではこれらの論考に依拠しながらも、特にそれぞれの事象における若き平塚の葛藤とゆらぎに焦点をあて、これに立ち現れる西洋近代的な社会構成と伝統的な社会構成の混在とせめぎあいを描き、ロマンチック・ラブと近代家族に関する葛藤を整理していきたいと思う。もちろん、平塚の思想や実践の葛藤やゆらぎ自体は当時の日本社会に生きる女性たちの葛藤やゆらぎの一般的なモデルではない。しかし、平塚を一つのケースにしながらか、「西洋」-「日本」、「近代」-「伝統」がいかに混在し、そこにいかなるロマンチック・ラブと家族に関する葛藤とゆらぎの契機が見られたのかを考えることは可能であろう。

本稿ではまず、Iで平塚が生まれてから母となり現実生活に対応しはじめた時期までである1880年代から1910年代までの日本の歴史、とくに西洋近代との関係を明らかにし、そのなかで平塚が西洋的な近代と日本的な伝統とどのように向き合ったのかを述べる。IIでは、平塚の近代的な家族制度を揺るがすようなロマンチック・ラブの思想と実践をたどりながら、そこにおける葛藤とゆらぎを示す。IIIでは、平塚の生育家族と、事実婚後の家族実践との関係から、近代家族に関する思想と実践、そこにおける葛藤とゆらぎを示す。IVでは、IIとIIIで示した葛藤とゆらぎについての考察を展開する。

## I. 歴史的 position

### 1 平塚が生まれた時代—政治的転換期

平塚が生まれた時代は日本にとっていかに過渡的な時代であったのだろうか。平塚が生まれた 1890 年ころは「西洋」との出会いによって江戸期の政治体制が革命的に変貌した日本が、その「西洋」に追いつき同一化を完成させようとしていた頃であった。平塚の最初の記憶は 1889 年 2 月 11 日の大日本帝国憲法発布を祝う祝典の街の風景だと回想されている（上：3-6）。また、このような西洋に肩を並べるための制度の改革は、もう一方で保安条例による集会の禁止、言論の弾圧など国民を統制する方向へも進展していった。

「日本」の「西洋」への同一化は、次第に「西洋」への対抗へと変化する。最終的にはアジア大陸へと「日本帝国」を膨張させていく。平塚の幼少期の日本は、井上馨外務卿が欧米諸国との不平等条約の改正を円滑にするために極端な欧化主義をとっていた。しかし、次第に西洋と肩を並べるようになった日本は、不平等条約への不満や東アジア進出をめぐる、欧米諸国との対抗姿勢を強めていった。平塚が小学生になる明治 20 年代ころから、欧化政策への批判として、思想界は日本的な伝統・美質を強調する国粹主義に傾倒し、「西洋」に対する「日本」の「特殊性」が語られていった。そして、次第に東アジアへの進出をめぐる清国とも関係を悪化させ、1894（明治 27）年 8 月に日清戦争に突入する。日本はこの日清戦争に勝利し、「東洋の盟主」をめざすための、日露戦争の勝利後にはさらにロシアやアメリカを「仮想敵」として「帝国作戦の本領を攻勢となす」ための大軍拡を推し進めていった（芝原 1980：206）。平塚も「明治三十年代前後は、鹿鳴館時代を頂点とした欧化主義からの反動で、国粹の声につれ、万事が復古調の世相」となっていたと回想している（上：80）。こうして対外膨張をはじめた日本帝国は、平塚が奥村博史と共同生活をはじめた大正期に、第一次世界大戦を契機にして英・独・仏・米の四大国と肩を並べる帝国へと進んでいった。1914 年夏、この世界大戦に日本政府は日英同盟にしたがって参戦し、ドイツの租借する中国の青島や赤道以北のドイツ領南洋諸島の一部を占領していった。ついで、翌年には中国政府に南満州および東部内蒙古の既得権益の半永久的な確保、山東省のドイツ権益の譲渡などを受諾させた。

このように、平塚が生まれ母になるまでの 1880 年代から 1910 年代は、近代的暴力を備えた欧米との出会いにより、日本が江戸期の政治体制を革命的に変貌し、暴力を受ける側から、植民地支配も含め、暴力を与える側に変容していく時期、つまり日本近代史の過渡的時期であった。

### 2 平塚の対西洋・対伝統に関する葛藤

このように国家の水準で西洋近代との関係が過渡的な時期において、平塚は対西洋的近代・対日本の伝統に関しての葛藤をはらんだ、あるいは融合的な思想と実践を持っていた。

平塚が学校教育を受けた時期はまさに近代教育が成立しはじめた時期であった。平塚の家庭は父定二郎が会計検査院第一部第四課検査官であり、平塚は上・中流家庭で育ったのである。そのため、高学歴のステイタスを持って少年期、青年期を過ごしており、東京女子高等師範学校付属高等女学校（通称お茶の水高女）のち、日本女子大学家政学部を卒業している。このような学歴を持つ平塚はいわば当時のエリート女性だったのである。

平塚が幼稚園に入学した1890年には、教育勅語が発布されている。小学校では紀元節などの挙式の際、校長が教育勅語を読み終えるまで頭だけ下げた直立不動の姿勢で我慢しなければならなかったこと、また、日清戦争のさなか担任の教員が三国干渉のために中国への遼東半島還付の経緯を子どもたちに説明しながら「臥薪嘗胆」を訴えた記憶を回想している(上:57-61)。平塚の小学時代とは子どもたちが教育を通して国家と向き合う機会が一般化し始めた時期といえる。その後、平塚は高等女学校時代から父や学校への反抗心をめばえさせたという。「女に英語は必要ない」という父の考えに反して自発的に英語を習い、親しい友人たちと「海賊組」をつくり、女学校が押し付ける良妻賢母主義の理想や因習的な結婚への反発から「結婚などしない」と誓い、また封建的な教育方針への反発から「修身の時間」をボイコットしたという(上:78-98)。

この高女時代以降から、平塚の考え方にはゆらぎが生じはじめている。自伝をみると女子大学在学中からその思想の過渡期がはじまっていったことがわかる。平塚は、女子大入学当初に、自身が傾倒していた日本女子大校長成瀬仁蔵の「女子教育」や実証哲学への違和感と反発心をいだいた。それから、宗教、哲学、倫理関係の書物など「もっぱら抽象的なものに惹かれ」、「本の虫のようにして書物を漁った」という<sup>3)</sup>。この当時、平塚は「神とはなにか、我とはなにか、真理とはなにか、人はいかに生きるべきか」という問題の追求に休みなく駆り立てられていた(上:55-157)。

そんな中、綱島梁川が神を見た宗教的体験を記した「予が見神の実験」という告白文、鎌倉円覚寺の初代管長、今北洪川(こうせん)の『禅海一瀾』という書物と出会い、禅に傾倒していった。そして、釈宗活老師のもとで禅の修行に励み、1906(明治39)年の7月、老師に見性を認められ、慧薫(えくん)という安名を受けた。このように女子大以降の平塚は、日本近代的な「封建的な教育方針」でもなく西洋的な思想でもなく、伝統的な禅へと傾倒していったのである。そして、この見性は平塚にとって「まさしく第二の誕生」であった(上:187)。平塚はこの見性の時期を「一生を通じていちばん生命力の充実した最高潮の精神的次元に生きていた時期だった」と回想している(上:189)。井出(1987)や佐々木(1994)が指摘しているように、平塚の「元始」は、女権宣言というよりも、禅による神秘的な経験の影響によるものであるという。この「元始」にある「隠れたる我が太陽を、潜めるわが天才を発現せよ」とは、平塚によれば「各自がその自我の当体に到達することによって、失われた女性の生-創造力-の全的回復を求めたもの」であり、自分は坐禅の見性でこの「境地」に到達したとしている(上:336)。彼女が雷鳥、つまり「らいてう」と改名した経験が「高原の秋」(1911)に記されているが、そこでは平塚自身が雷鳥になって太陽の周囲を飛び廻り、それ見上げる自分の姿が描写されている(1:59-60)。佐々木はこのような描写を「禅に通ずる『主客合一』」での「視覚的経験」であり、「見性の反復」の叙述だと指摘している(佐々木1994:124)。

ただし、平塚は西洋思想の影響も多分に受けている。たとえば「元始」の「太陽」と「月」の修辭がニーチェの『ツァラトゥストラ』の修辭と相似していると指摘される。このことに対して、平塚はニーチェの思想の潜在的影響を認めながらも、ニーチェとは比較にならぬ重さを持っていた坐禅の体験から得た影響だと主張している(上:334-6)。その後、『青鞜』の巻が重なるにつれ、平塚は西洋思想により傾倒していった<sup>4)</sup>。『青鞜』時代の西洋思想の影響について著した山本によると、『青鞜』時代の平塚が共鳴し、自らの考えや生き方の立脚地としていったものが、スウェーデンの評論家エレン・ケイ(1848-1926)の『恋愛と結婚』(1903=1973)である(ケイの影響は、

恋愛結婚の賛美、奥村との事実婚、母性保護の主張に色濃くあらわれているため、Ⅲ以降でとりあげる)。また、平塚はアメリカの社会学者レスター・ウォードの『女性中心説』、イギリスの性科学者ハヴェロック・エリスの『性の心理学』(1897)、『性的特徴』(1894)などに呈示される母としての女性性の強調に共鳴していった<sup>5)</sup>(山本 1999: 149-58)。特に、平塚は『青鞥』の表紙を担当した尾竹紅吉と親密関係にあった際、エリスの同性愛論に興味を持っていたようである。

このように、『青鞥』創刊前後の平塚は、「禅」という伝統思想に巻き込まれながらも、西洋思想にも影響を受け、混合思想のような、井出にいわせれば「合理精神と非合理の二つの極」(井手 1987: 82)を持った思想を展開していった。この混合的思想が、平塚の葛藤、ゆらぎを生じさせていったといえる。

## Ⅱ. ロマンチック・ラブとセクシュアリティをめぐる思想と実践

このように混合思想をもつ平塚は、禅的な思想に触れることで男性との「接吻」に主客合一を求め、その後、西欧的恋愛観に触れることで恋愛による女性の主体確立を求めるようになった。いずれにしても、平塚のロマンチック・ラブの思想と実践は、近代的結婚観を揺るがすようなものと位置づけられる。ここでは、平塚のロマンチック・ラブとセクシュアリティをめぐる思想と実践を、平塚が夏目漱石門下の森田草平と起こした心中未遂事件である煤煙事件、禅寺の僧侶との初体験、青鞥社員である尾竹紅吉との同性愛、奥村博史との事実婚からたどる。

### 1 煤煙事件

『青鞥』発刊の三年前である 1908 (明治 41) 年、22 歳の平塚は、当時中学教師であり妻も子もある森田と栃木県塩原温泉郷奥の雪深い山中で心中未遂をおこす<sup>6)</sup>。この事件については佐々木 (1994) が秀逸な分析を行っているため、多くの情報はこの論稿に依拠する。ここでは、相互にかみ合わない森田と平塚に焦点をあてて述べる。

心中事件当時、平塚は臨済禅の影響により主客を同化させるような「宗教的情調の伴った」状態であった。一方の森田は西欧文学の影響により女性を客体化しながらデカダン文学の舞台に配置しようとする思想を持っていた。このような二人はかみ合うことができなかった。佐々木によると夏目漱石は二人の心中事件のいきさつを聞いたとき「二人の遣って来たことは恋愛ではない」「それは智的闘争 (インテレクチュアル・ファイト) に過ぎない」と評したという (佐々木 1994: 18)。

平塚はこの当時、見性体験を果たし「過剰な精神力」に満ちた日々であったが、森田にはその姿が「癲癇」や「異状」と映っていた (佐々木 1994: 4)。一方、当時の森田はダヌンツィオの『死の勝利』に心酔しており、たとえば『煤煙』も『死の勝利』を下敷きにしており (上: 272)、また、森田の平塚へのアプローチ方法や指や頬へのキスもダヌンツィオの諸作品の焼きうつしであった。そのような森田の態度について平塚は自伝で「それがものを愛撫するという自然の感情の動きではありません。どうも何かとわざとらしく、空々しく、ものまねめいて見えます。…略…何というか森田先生という人間そのものの真実が直接にこちらの心にふれるということが全くないので。『一体全体この人は? ……本気がない!』」(上: 216-7) と振り返る。

「元始」で述べられるように、平塚にとって「接吻は実に『一』である。全霊よ、全肉よ、緊張の極みの円なる恍惚よ、安息よ、安息の美」(1: 21) である。この「一」について佐々木は、禅

の影響下の平塚が目標としていた「彼我一体」,「主客合一」の「一」であり、平塚が「接吻」をこの目標への到達経路と位置づけていたと解釈している。森田が平塚を騙して逢引きを設定した際におこなわれた接吻についても佐々木は詳述している。その密会で平塚は禪の三昧によって「宗教的情調の伴った」特殊な状態になっていた。そこで森田の虚偽への怒りを抑えられたのも、感情の抑揚も、突然流れ出た大量の涙もその特殊状態にあったゆえである。そのような状態のなかで接吻によって主客合一を果たそうとする平塚に対して、森田はダヌンツィオの「ものまね」を繰り返して、「本気がない」と平塚を白けさせていたのである（佐々木 1994：43-50）。そこで禪的心情からでた「本気になれ」という平塚の吐露は、森田には性的情熱に映ったようである。そして、森田は平塚を「待合」へ誘い性的交渉をそれとなく持ちかけるが、平塚にキッパリとかわされるのだった（上：217-21）。おそらく煤煙事件の記事や『煤煙』の読者の目には事件前後の平塚がロマンチック・ラブの主人公に映っていただろう。しかし、実のところ平塚は伝統的な臨濟禪に影響を受けて「主客合一」を目指そうとしていた禪的思想の追従者だったのである。森田の手によって西欧的なロマンチズムとして映し出されたその姿は、森田のデカダン文学の舞台装置に同一化することで主客合一をめざした平塚の姿にすぎなかったのである。このような点から、煤煙事件は西洋的思想かぶれの森田と、日本伝統の禪的思想に染まった平塚との葛藤によって生じた「智的闘争（インテレクチュアル・ファイト）」だったのである。

## 2 僧侶との初体験

平塚の初体験に関する思想と実践は、女性が自己決定によって初めてのセックスの相手を選ぶという点で、またその相手への愛情と自らの性欲が同時に生じた時を適当なきっかけとする点で近代的結婚制度を揺るがすものであった。しかし、この初体験に関する思想と実践についても、平塚自身の葛藤、ゆらぎ、そして変化が生じているといえる。

平塚が語る女性の初体験、処女についての思想は、1914年に『反響』9月号に掲載された生田花世の「食べることと貞操と」の記事をきっかけとした「貞操／処女」についての論争への言及の中に示されている。「処女の真価」（1915）と題するこの評論で、平塚は「処女が大切であるか、ないか」ではなく、「問題は『彼女には何時まで処女を保つということが、彼女自身のために大切か』」で、「それほど個人的な問題である」と説く。すなわち、平塚は女性自身が自分で初体験のタイミングと相手を選択することの重要性を説いているのである。そして、処女を捨てるのに最も適した時として、「恋愛の経験に於いて、恋人に対する霊的憧憬（愛情）の中から官能的要求を生じ、自己の人格内に両者の一致結合を真に感じた場合」と述べている（2：57-8）。

このように語る平塚は1910（明治43）年にすでに最初の性体験をすませていた。煤煙事件前後に決して森田に性体験を許さなかった平塚が、はじめての相手として選んだ相手は海禅寺の和尚中原秀獄であった。『元始』によると、平塚は煤煙事件の際、新聞紙面に海禅寺の名が取り上げられてから足を向けるのを控えていたが、友人の木村政子に連れられて海禅寺に再び出入りするようになった。中原と酒を酌み交わす仲になる中で、ある夏の日、湯島天神の近くにある白昼の待合で中原と「結ばれることになった」という。平塚は未婚の娘として、自分の行為が不道德だと思わなかったこと、「連れだって待合へ出掛けたことをはじめとして、その後のことはすべて自分の意志によること」と回想している。中原への愛については「以前のような好感をもてなくなっていた」と

ことわりながら、「やはり和尚は、わたくしにとって好ましい心に残る男性」だったので「自分の処女性を破った」と述懐している。ただし、その動機について、煤煙事件のあと送付先不明で送られてきた春画をきっかけに「無意識のうちに育っていた」、「性に対する好奇心」、「手さぐりの模索」もあったと補足している（上：283-7）。

この初体験に関する思想と実践は自分の意思で「はじめて結ばれる」相手を選択するという部分は共通している。小林登美枝が処女性を自ら求めて平塚が破ったことを、「当時の社会通念に対する大胆な挑戦」だと評しているように（小林 1977：222）、この自己決定は近代的結婚制度を揺るがすものだった。ただし、この平塚の体験の動機づけと、「処女の真価」（1915）においてこのような初体験を「婦人の中心生命である恋愛を成就」させるものだとする（2：58）主張とを比べると、平塚にゆれがあることがわかる。この処女観のゆれを平塚自身が自覚していたからか、井出によると平塚はこの中原との性交について長らく秘密にしており、80歳になって書いた自伝で初めて明らかにしていた（井出 1987：68）。また、平塚のはじめての接吻の相手もこの中原だった。しかし、それは坐禅の三昧後の「安らかなみちたりた気持ち」のままの精神状態で、暗い廊下を照らしてくれたお礼のつもりで「不意に、何のためらいもなく接吻」したという。この接吻を真に受けた中原は、その数日後に平塚に求婚し、その心づもりは一切ない平塚に断られてしまう（上：207）。

処女性への意識変化の契機とは、この初体験から貞操論争の間におけるエレン・ケイの『恋愛と結婚』と、奥村博史との出会いであろうと思われる。平塚が「興味深く感」じたケイの思想とは、人間の本質を精神と肉体とに分離するキリスト教的な二元論的見方を否定し、肉体と精神とが融合された生殖欲を伴った性愛である恋愛こそが、生命を生み出し種族に繁栄をもたらすというものであるという（1：404-5）。その後、平塚は事実婚、出産、育児をとおして、愛にもとづく性行為は生殖に帰結するべきだという立場に変っていく。墮胎や避妊の是非を論じる墮胎論争で、平塚は、「性行為を、その結実である子供に対する責任から切り離して、ただ単に自分たちの刹那の官能的享楽の目的のみに行うことに対する、人間の魂の感ずる道徳的不満」だとし、快樂のみを目的とした性行為を否定していくのである（2：338）。

### 3 同性愛

ここでは平塚と尾竹紅吉の同性愛から、平塚のセクシュアリティに接近する。『青鞥』を創刊した翌年の1912（明治45）年春ころ、尾竹が大阪から上京し、青鞥社に入社する。父や叔父たちが日本画家であり、自らも画を描いている尾竹に、平塚は『青鞥』の表紙を書かないかと誘った。そのために上京し、平塚を訪ねたときの様子を尾竹は、「襖があいた時、私はぴったりと顔を伏せてしまった。これがこんなにも長い間会いたくて思っていた人なのだ」、「あの端麗な気品の高いすばらしく美しい平塚さんの顔に眼をつけた」、「この人だ、この人だ、私はまるで偶像をおがむように平塚さんの前でかたくなってしまった」と記している（下：365）。一方の平塚は、「すらりと伸びきった大きな丸みのある身体とふくよかな丸顔をもつかわいらしい少年のような人」と思ったと回想している。この頃の尾竹は「久留米緋に袴、または角帯に雪駄履きという粋な男装」だった（下：365-6）。編集の手伝いをするなかで、尾竹は異性には全くひかれる様子もなく、平塚に「まっしぐらに近づいて来」たという。そして、文通が始まるのだが、平塚が一とすれば、尾竹は一〇

というようなものだった（下：368）。尾竹の平塚への思い入れの深さを見てとることができる。

1912年に尾竹は「五色の酒」,「吉原遊興」のスカンダル<sup>7)</sup>のきっかけとなったことを理由に、青鞥社を退社する。そして、自責の念からか、スカンダルと『青鞥』への非難の騒ぎの中、手首を切って自殺を図る。平塚はその傷を眺めた時、「わたくしに対して示された、紅吉のいじらしい愛の証を語るものよう」であったと回想している（下：379）。この時の状況は『自伝（下）』では深く語られていない。尾竹の自殺の後の『青鞥』で発表された「円窓より－茅ヶ崎へ、茅ヶ崎へ」をみると、二人の仲が深かったことがわかる。そこには青鞥社の「ミーティングの夜」において、「紅吉を自分の世界の中なるものにしようとした私の抱擁と接吻がいかに烈しかったか」と記されている（平塚 1912：82-3）。エッセイのなかで平塚は、尾竹に「私の少年よ。らいてうの少年よ」と呼びかけ、いかにその「少年」が自分に好意を示していたのかを語り、自身も「同性の恋」について考えたと記している（平塚 1912：85-9）。

平塚は尾竹とのこの愛を、同性愛か異性愛かのどちらかに位置づけようとし、ゆれていた。『自伝（下）』の回想のなかで、「紅吉のわたくしに対して抱いた感情は『同性への恋』であったのですが」、自分は「いわゆる同性愛的な気持ちで、紅吉をうけいれたわけではありません」とし、「それが同性愛でなかったことは、奥村に大きく傾いたわたくしのそれからの心の動きが物語っている」と記している（下：388）。しかし、「円窓より－茅ヶ崎へ、茅ヶ崎へ」では尾竹との「同性の恋」について一晩中考えたと記されている。また、渡辺によれば、『青鞥』では1913年3巻1号の神崎恒の「雑木林」をはじめ、1915年5巻3号の菅原初「旬日の友」、川田よしの「女友達」など「女同士の親密な友情やエロティックな感情」を描いたものがいくつか掲載されている（渡辺 1998：270）。『青鞥』においても同性愛への肯定的な立場があった。

その立場は、奥村博史との出会い、そしてイギリスの性科学者ハヴェロック・エリスの『性の心理学』（1897）との出会いから変更されはじめる。「紅吉のわたくしに対する異常な愛情、（博史への：引用者補足）とりわけ激しい嫉妬に驚き、また悩まされてもいた」平塚は、エリスの同性恋愛の研究を手にとったという（下：543）。この翻訳は1914年『青鞥』4巻4号に掲載されている。黒沢（1996）によれば、エリスという近代知と博史との恋愛に出会った平塚は、病的な「同性愛者」として尾竹を意味づけていった。そして、晩年の『自伝（下）』では、ついに「同性愛ではなかった」（下：388）と位置づけられているのである。

#### 4 封建的婚姻制度外の性関係とエレン・ケイの影響

1912（大正元）年夏、『青鞥』1周年記念号の編集と尾竹の療養見舞いのために訪れていた茅ヶ崎で、平塚と画家の奥村は出会った。奥村は当時『青鞥』を発行していた東雲堂の主人西村陽吉の連れの客であった。その時の奥村の印象を「ひと目で好ましいものに思われました」（下：383）と平塚は回想している。一方の奥村は平塚と会って「心臓を一突きに射抜かれたようなせんりつが走った」という（下：384）。その運命の出会いの2,3日後の雷鳴の夜、病室に泊ることになった奥村を気遣って、平塚が自分の宿に迎え入れた。奥村の自伝によると、その夜、平塚に引き寄せられ接吻されたという。このときのことを平塚は『自伝（下）』で「彼の熱い血潮に触れたいような衝動を抑えかねた」（下：387）と記している。ここから、お礼のつもりであった中原秀獄との接吻、主客合一を求めた森田草平との接吻とは違ったものだということがわかる。一度は平塚の前か



ら消息を絶った奥村であったが、翌年の春再開し、その年の6月下旬に二人で訪れた赤城山で結ばれたという。平塚は「求めあってふたりの若い魂が、ひとつの命にはじめて結ばれる」と回想している（上：476）。この回想や奥村への「生まれてはじめて抱いた真の恋愛感情」（上：479）という表現から、「好ましい」からしたという中原との初体験と奥村との性的関係が違うものだということがわかる。このように、奥村との恋愛が平塚の性愛観を変化させたことがわかる。

この奥村との恋愛に加えて、ケイの『恋愛と結婚』との出会いは、平塚の恋愛と結婚に関する考え方を変えていった。形式的法律婚を否定し、恋愛至上主義を主張するケイの思想に触発された平塚は、奥村との「愛の共同生活」をはじめていく。ただし、共同生活にいたるまでの経緯には、博史の平塚家の来訪が食事時だったり、夜遅くまでだったりすることに平塚の母が警戒的な態度をあらわすようになったこと、奥村の下宿に平塚が来るのを嫌がった主人に出ていくよう促されたことも含まれる（上：479-80, 487-9）。

ケイの影響を受けた平塚は理想の結婚を、男女間の恋愛による結合によるものであると主張した。平塚は「世の婦人たちへ」（1913）で、「愛なくして結婚し、自己の生活の保障を得んがために、終生ひとりの男子に下婢として、売春婦として侍しているような妻の数は今日どれほどあるか知らないでしょう」と問いかけながら「愛」のない結婚を否定する（1：220-1）。しかし、現行の封建的婚姻制度はこの愛のない結婚制度を是認するようのものであった。平塚は現行の法制度や家族制度に不満があるため、その制度もとの婚姻を否定していた。

このような思考を持ちながら、平塚は1914（大正3）年1月に、僅かな荷物を持って巢鴨の植木屋の離れで、奥村と共同生活をはじめた。この際、平塚は両親にこの共同生活について長い手紙を渡し、それを「独立するに就いて両親に」と題して『青鞥』に掲載した。そこには、自分に独立の決心をさせたのは「全くH（博史：引用者補足）に対する私の愛の力だ」と、「私は五分の子どもと三分の女と二分の男を有っているHがだんだんかわいい者になって参りました」と奥村への愛が語られている。また、「現行の結婚制度に不満足な以上、そんな制度に従い、そんな法律によって是認して貰うような結婚はしたくないのです」と現行の封建的婚姻制度への不満を述べる。そして、この結婚制度を「今日の社会に行われる因習道徳は夫の親を自分の親として、不自然な義務や犠牲を当然のこととして強いるなどいろんな不条理や束縛を加えるような不都合なことも沢山ある」と批判している。さらに、自分たちのこの共同生活を「恋愛のある男女が一つの家に住むということほど当然のことはなく、二人の間にさえきわめられてあれば形式的な結婚などはどうでもかまうまい」と正当化するのである（1：289-93）。

このような私信をあえて掲載したことについて、平塚は以下のように回想している。

古い封建的な結婚制度に反対し、恋愛が発展して自然的に実を結んだ、自由な共同生活に新しい性道徳の基礎をおくわたくしの考えと、それを身をもって行うことの意義を、社会に、ことに多くの同じ問題でなやむ婦人たちに、知らせたい気持ちからでした。いま、自分のやることが、大勢の同性の問題ともかかわりがあるという自覚——ある点では気負いが…この私信を『青鞥』誌上に発表させた（上：512-3）

ここから、平塚が自分は旧思想に反対し新しい思想に傾倒するだけでなく、身をもってその思想

を実践すること、その実践が個人的なことではなく社会的に影響を与える実践でありたいという思いをもっていたことがわかる。井出によれば、このような法律、もしくは家の認可がない男女の結びつきは、当時としてはまれであり、平塚のような上・中流家庭出身であればなおさらだった（井出 1987: 116）。そのような状況にあって、男尊女卑へのアンチテーゼとして、平塚はパートナー同士の対等な関係を実践していたのである。

桑原（2006）で明らかにしたように、ケイの思想に傾倒した平塚は、次第に恋愛結婚を絶対視し、さらには優生思想的な恋愛結婚観を提示していくようになる。たとえば「結婚の道徳的基礎」（1918）のなかで、恋愛結婚以外の結婚は「醜悪」だと批判し<sup>8)</sup>、恋愛結婚を絶対視している（3: 15）。さらに、ケイの恋愛結婚観が優生思想につながっていたことから<sup>9)</sup>、平塚は恋愛結婚を称賛する一方で、性病などの病気にかかっている人々の結婚を制限することを国家に求める主張も展開している<sup>10)</sup>。つまり、ケイの影響を受けた後の平塚の結婚観は、結婚の自由を謳いながら、同時に国家による結婚の制限を求め、抑圧的な結婚観を提示するという矛盾したものだだったのである（桑原 2006）。

### Ⅲ. 家族をめぐる思想と実践

#### 1 生育家族

平塚が育った平塚家は、共時的にみれば「近代」と「非近代」の生活様式と文化が混在し、さらに通時的にみれば欧化主義から国粹主義へ転換するという構図であった。この構図は平塚だけでなく平塚家の人々の葛藤を生み出していった。ここでは、平塚の生育家族におけるこのような構図と、そこから派生する葛藤について述べながら、平塚の思想背景に迫っていきこう。ここでは特に引用出典の記載がない場合は、『自伝（上）』の「わたくしの生いたち」（上：3-46）を中心として記述していく。

平塚の家族は父の定二郎、母の<sup>つや</sup>光沢、<sup>ちか</sup>姑の八重、父の妹の<sup>ちか</sup>同、年子の姉である次女<sup>たか</sup>Ⅱの<sup>はる</sup>孝、三女の<sup>はる</sup>明（平塚の本名）、使用人の乳母と女中という8人で暮らしていた。郷里の親族をあずかる場合もあり、麴町区（いまの千代田区）にある平塚家は大世帯であった。平塚の父の定二郎は上級官吏であり、母の光沢は田安徳川家に仕える医師の家から嫁いできた。

まず、父の定二郎についてみていこう。ドイツ語が堪能な平塚の父は、1882（明治15）年に参事院書記生となり、商法草案作成中心メンバーのドイツ人、ロエスエルの側近として通訳、翻訳の仕事をしていた。そして、直接憲法草案の起草にも携わっていた父は、平塚が生まれた翌年1887（明治20）年5月から翌年12月まで、会計検査院法調査のため会計検査院長の渡辺昇に随行して欧米諸国をまわっていた。その時の家族への西洋の土産は着せ替えができる西洋人形、オルゴールなど数えきれぬほどだった（上：5-10）。この土産の質と量から、定二郎の西欧への憧れと崇拜を垣間見ることができる。

平塚の父と家族との<sup>ちか</sup>かわり方をみると家族観が二分化していることがわかる。たとえば、自身の親に対しては「孝心深い父」（上：23）であり、妻と子どもたちに対しては「家庭的な父親」（上：25）であったという。彼は、結婚前に存命だった平塚の祖父為忠に対しては金銭を工面しながら大学病院へ入院させ、平塚の祖母八重に対しては出勤時と帰宅時に必ずその部屋へ行き、手について挨拶するなどしていた（上：27）。妻や子どもたちに対しては、日曜日にはたびたび人力車

を使って行楽に連れて行っていた。その行先は上野動物園、浅草の花屋敷、小石川の植物園などであり、この当時、このような行楽は一般的ではなかった（上：37-8）。また、家の中で彼は妻と子ども達と一緒にトランプ、スゴロク、五目並べ、将棋などに興じていた（上：32-3）。このような父の態度は、平塚研究者によって、西欧の市民生活を自分の家庭に取り入れている（井出 1987：16）、近代的な幸せな家庭の和樂をめざしたものだ（小林 1977：36-7）と評されている。平塚自身も「平穩な家庭のなかで、末っ子のわたくしは家族の愛を集めながら育ちました」（上：7）と回想している。

父の平塚への態度には葛藤があらわれている。父は平塚を女学校時代まで釣りのお供をさせ（上：69）、「わたくしのなかに男の子を求めていた」（上：75）様子を見せていたという。しかし、父は女学校時代に平塚が富士登山計画を練っていたのに対し、「そんなところは女や子どもが行くところではない」（上：120）と、また平塚の女子大学志望も「女の子が学問すると、かえって不幸になる」（上：133）と反対したという。この父の平塚への態度は、ジェンダーフリーの雰囲気を感じさせながら、同時に「女だから」と締め付けるという矛盾したものであった。

次に、母の光沢について述べる。平塚の父が研究調査渡航の間、母は「文明開化の先端をゆく官吏の家庭の主婦として、また、欧米の旅にある夫にふさわしい妻として」桜井女学校（後の女子学院）へ英語の勉強に通っていた。また、それ以外にも洋裁、編物、刺繍などの勉強のために一ツ橋の女子職業学校へも通学していた（上：7）。代々江戸住まいの由緒ある飯島家に生まれ、江戸に育った平塚の母は、早くから遊芸を仕込まれて育ち、踊りの常盤津は17歳で名取になるという腕前であった（上：26）。しかし、夫である定二郎が遊芸を極端に好まなかったため、彼女は三味線を弾くことも、好きな踊りを踊ることも許されなかったという（上：27）。しかし、父や祖母八重が留守の間、ひそかに踊りを踊る姿を平塚に何度か見せている（小林 1977：57）。彼女は自分の好きなものと夫への「婦徳」との間に葛藤を抱いていたのであろう。このような母は夫に対して「自分を殺すことに務める」ことで従い、その夫からは「しとやかな美しい妻として愛されていた」と平塚は回想している（上：28）。ここから、夫と妻それぞれの夫婦観の違いをみることができる。平塚の母は父定二郎の反対した女子大の入学への支援、『青鞥』運営の資金、孫誕生後の住居の購入の金銭的支援など平塚に対して援助を惜しかなかった。その母の態度について平塚は、『自伝（Ⅳ）』で「母は自分に求められない自由な生き方への夢を、私に託したのかもしれませんが」と回想している（Ⅳ：193）。ここからも、母の「婦徳」と「自由への憧憬」の間の葛藤をみることができる。

次に祖母八重について述べる。母光沢が女学校や職業学校に通学していたため、平塚は父方祖母の八重に世話になることが多かった。1833（天保4）年生まれで紀州育ちの祖母は、片時もじっとしてられない働き者であり、1919（大正8）年に84歳で亡くなるまで、故郷の紀州なまりを生涯捨てなかったという。平塚によれば「まったく開けっぴろげで庶民的」であり、身なりもいっこうに構わない祖母は、どこか堅苦しく、いつも取り澄ました母とは対照的だったという。祖母は淘宮術（心身鍛錬法と易の加わった開運術）に熱中し、生年月日と人相から、人の気質や性格をよく判断していた（上：7-12）。どんな時も人力車を使う母に対して、祖母はいつでも徒歩で移動し、祖母に連れられることの多い平塚は、足だけは丈夫だったようである（上：30）。このように祖母は前近代的価値観や生き方を平塚に示していたといえる。

最後に、幼少期の生活様式、つまり家族の服装、幼少期の家の間取りや部屋の様子をみていこう。父の欧米巡遊以降、姉妹はおそろいの洋服を着せられていた。また、このころの母は前髪を縮らせた髪型で、両肩を高く立て、コルセットで胸を細くしめるなどの洋装をしていた（上：8）。このような母の洋装に対し、祖母は髪を切り下げ、男物仕立ての着物に、黒縹子の半巾帯をきちっとしめたスタイルであった（上：11）。また、祖母は暑いときは肌脱ぎになるときがあり、母はその姿を嫌がっていたという（上：10）。

麹町時代の家の間取りは、玄関、洋風の応接間、書齋、母の部屋、祖母の部屋、食堂、女中部屋、ほかに、来客時に使う純和風の一間だけの2階があった。井出によれば、食堂といってもそこは膳を並べる場所で、家長の膳は上座にあり、品数も他より多く、母親と祖母同士、姉妹同士で一つの膳を共有していたという。母の部屋は寝室も兼ねていたようだが、当時から考えると母親の部屋というのはめずらしく、平塚家は現代的な間取りだった（井出 1987：13-5）。欧化主義の全盛時代の頃、父の書齋は、一面に花模様の絨毯が敷かれ、その上に椅子、テーブルが置かれ、書棚にはゲーテ、シレル、ハイネなどの著作が並び、天井からはシャンデリアが下がっていたという（上：9）。このような父が表象する「近代」とは、「西洋への幻想と憧憬にみちあふれた」もの（井出 1987：15）、『『西洋』の装いを持った日本の『近代』』（米田 2002：7）であった。平塚とその姉は、一方ではこの父の書齋でストーブにあたりながら父からグリムやイソップの童話を聞き、他方では、祖母の部屋で炬燵にあたりながら日本の昔話を聞いていたという（上：16, 33）。このように、平塚の幼少期の生活空間を見ても、新旧、和洋が折衷した空間であることがわかる。明治 20 年代は、東京全体に新旧、和洋さまざまな生活様式と文化が織り交ざっており、同時期の平塚家のこのような様子は都市の様子や日本近代を端的に物語る縮図だとみなされている（小林 1977：25；米田 2002：11）。

しかし、明治 30 年代前後になると、この和洋混合も国粹主義の台頭と日清戦争期のナショナリズムの高揚によって「復古調」へ変化していく。最後に、この「復古調」によって、上で見た生活様式がどのように変化したのかをみていこう。日清戦争の少し前の頃から、「洋装、束髪で前髪をちぢれさせていた母が丸髷を結うようになり、姉とわたくしも、洋服から紫矢紺の着物に変えて、稚児髷を結うという変わりよう」（上：81）であった。洋間の定二郎と光沢の居間は畳敷きとなり、外国の名画の写真がはってあった襖紙は、日本的な模様に変り、西洋美人の半身像の額は、教育勅語の横額に取って代わったという（上：81）。

それでは、このような生育家族の思想と実践を受けて、平塚は奥村とどのような家族を形成していったのかを次でみていこう。

## 2 事実婚後の家族

Ⅱの4でとりあげたように、1914（大正3）年1月、平塚と奥村博史は巣鴨町で「封建的婚姻制度への抵抗」となる「共同生活」をはじめた。ここでは、この事実婚後の平塚の家族に関する思想と実践を、『自伝（下）』の後半部（下：469-611）を中心にたどっていく。奥村とともに形成したこの「新しい家族」は、平塚に自由恋愛成就後の厳しい現実と、個人としての自分と母としての自分という葛藤をもたらした。

まず、自由恋愛という理想を叶えた後に訪れた厳しい現実から「新しい夫婦」の実践をとらえて

いこう。事実婚を始めたばかりの二人を待っていたのは、質屋通いするほどの経済的困窮であった。奥村は賃金労働を一切せず、絵を描き演劇に出演するなど自由に暮らしていた。この当時も平塚が家計を支えていたため、炊事は平塚より「料理がうまかった」奥村との分担であった（下：542）。新婚当時、二人は切迫した家計状況に不釣り合いな贅沢をしていたようである。たとえば駒込橋近くの「やや高級なめし屋」で、当時では非常に珍しい、夫婦そろっての夕食をしたり（下：520）、西伊豆の土肥温泉へ旅行に出かけたりしていた（下：526）。孫の奥村直史によれば、平塚家族は常にこの「大変アンバランスな家計を平気で通す家庭」の状況であり続け、子どもたちを学費のかかる「成城学園」に通わせながらも、その子どもに「授業料をしばらく待ってください」と書いた手紙をたびたび持たせていた。この「アンバランスな家計」は戦後も続いていたという（奥村2011：111）。ただし、前項で書いたように母光沢の援助はたびたび受けていた。

また、この経済的困窮の生活のせいで「奥村との愛の新生活のなかで『青鞥』が重荷になっていた」ようである。平塚を苦しめていたのは、『青鞥』編集の雑務や執筆活動に追われる毎日、家出をして泊まりに来る地方の青鞥社員や読者たちであった。この状況に平塚は心身ともに疲弊し、「静かな自分の時間を持ちたい」と願っていた。そして、『青鞥』の編集を伊藤野枝にまかせ、『現代と婦人の生活』の原稿料をもとに、保養のため千葉県御宿海岸へ奥村とともに転地する。このような疲弊と「静かな生活」の希求のため、平塚は『青鞥』の発行権を伊藤にゆずっている（下：549-53）。このように、静かに自由に勉強したい、それでも生活を支えなければ、『青鞥』を続けていかなければいけないという葛藤を平塚は抱えていたようである。

次に、妊娠、出産、母になる経験をとおして、平塚が抱えた「個人としての自分と母としての自分」との葛藤とゆらぎについてみていこう。平塚は「独立するについて両親に」（1914）で「子供が出来た場合にはどうするのか」という母光沢の心配に対し、私どもは「子供を造ろうとは思っていません。自己を重んじ、自己の仕事に生きているものはそう無暗に子供を産むものではないということをお承知いただきたい」と語っている（7：293）。このように子供を持ちたくない平塚であったが、1915（大正4）年に御宿海岸から帰京して小石川に転居して間もなく、ひどいつわりに泣かされることになる。つわりに苦しむ平塚に対して、奥村は冷たく、「わたくしがときどき嘔吐するのをひどくいやがり、不愉快をかくしきれない」様子だったという。その理由のひとつとして、煤煙事件をもとにした小説「峠」を家計のために執筆中だった平塚に、奥村が嫉妬したことが述べられている（下：553-6）。「母となる十分な条件がととのわない」うちに襲われたつわりの苦しみ、生計と夫の嫉妬の板挟みによって、平塚は「自分たちを幸せにしている愛情の創造物」である子供をよろこびとして受け入れられないという矛盾と、「子どもを育てながら、自分たちの仕事が、勉強がつづけられるだろうか」という不安と恐れを抱いたと回想している。このように妊娠によって平塚は、「個性をのばそうとする自分の生活と、母としての生活」（下：556-7）との葛藤を抱くことになったのである。

この妊娠による葛藤を整理するかのように、平塚は墮胎論争の一つの議論のひとつとして『青鞥』に「個人としての生活と性としての生活との間の闘争」（〔1915〕1983）を載せている。そこには、母となることへの不安と葛藤も示される一方で、愛を肯定して共同生活に入った自分が、また愛を深めることに務める自分が「愛の創造であり、解答である子供の身をどうして否定し得よう、それはあまりに矛盾した、不徹底な行為である」と、その葛藤と不安を一掃しようとしている。そ

して、「女らしさはただ母性にあり、すべての愛は、そこにはじまりそこに終わる」、「もし子供を拒もうとするならば、愛の生活全体をまず拒むべき」だと結論づけている（2：50-2）。このように、以前まで個人としての生活のために子どもを持つ意志がなかった平塚が、妊娠というライフステージにおいて思想を転換させたことがわかる。

しかし、第一子長女曙生（あけみ）の出産と育児は、出産前の奥村の肺結核による入院などで多難であった。出産と育児をとおして、個人としての自分と母としての自分という葛藤やゆらぎが、平塚のなかでまた浮上する。平塚は1915（大正4）年12月に長女を出産したが、高齢での初産のため、また奥村の看病とで身体が疲弊したため難産であった（下：582）。もうひとつ平塚を悩ませたのは、わが子の戸籍であった。平塚は父に迷惑をかけないために、平塚の家から分家して戸主となった。そして、自分の戸籍に入れたために長女は私生児となる。平塚は、分家の手続きをしたり、わが子の戸籍について戸籍吏とひと揉めしたりしながらも、「もともと現行の民法を無視している二人にとって、それはどうでもよいこと」だと捨て台詞のように回想する（下：583-5）。「ひと揉め」するほど法制度に固執しながらも「どうでもいい」と吐き捨てる平塚の姿は、矛盾を帯びているように見える。その後の1941（昭和16）年に奥村と平塚は、第二子で長男の敦史の徴兵のために婚姻届を提出し、現行の法に従う形でこの矛盾を解消したのである。

平塚は育児を体験してから、次第に自己の中の母性を認識し、母性保護論争においても母性尊重を主張していく。平塚は赤ん坊への育児をとおして、子どもへの愛で気持ちが満たされていくという自分の変化に驚いたと回想している。しかし、その一方で、育児による雑務と睡眠不足と子どもの泣き声に苦しみ、自分の仕事ができないことによる生活への不安、個人としての自分の欲求が満たされない不満によって疲弊していったという（下：585-6）。1917（大正6）年に、平塚は母となつてからの1年を振り返り、「エゴイズム（個人主義）」と子どもや夫への「アルリズム（他愛主義）」との「絶えざる闘争」の日々であったが、子どもに対する愛によって後者のほうが勝っていたと述べている（2：273-4）。このような経験をとおして、母性保護論争では、母親という労働が尊重されない現状を打破しようとし、母性尊重と母親の育児に対する社会的扶助の要求を訴えた。このような平塚の主張はエレン・ケイの影響によるところが大きい<sup>12)</sup>。

しかし、この平塚の母性保護の主張は、自由な恋愛結婚の実現のために、国家による家族の介入や制限を求めるという矛盾をはらんだものであった（桑原2006）。母性保護論争のなかで平塚（1918）は、女性の経済的独立を説く与謝野晶子への反論として「母性保護はまた恋愛結婚の理想を完全に実現し得る道」だと主張する。つまり、女性を金銭的に扶助することで、恋愛結婚が「資産あるものだけに限られ」という不公平がなくなるという主張である（2：367-8）。そして、「婦人は母たることによって個人的存在に域を脱して社会的な、国家的な人類的な存在者となる」（2：353）とする。そして、母の仕事を社会的事業とし、それに十分な報酬を与えることを求め（2：364）、さらに、「母の職能を尽くさないような婦人」は「報酬を与えないとか、子供を取り上げてしまうというようなことで罰したらよいでしょう」と母親業に対して厳しい労働管理を提言している（2：370）。つまり、平塚は出産と育児を国家に従属する労働と位置づけ、国家による労働への報酬と管理を求めているのである。

そのように主張する平塚であったが、母としての役目を果たせず、家庭か仕事かという葛藤を抱き続けたようである。「新婦人協会」設立のための多忙のなかで、子どもをかまえないことに「絶

えず苦しみ、悲しみ、自らを責め、詫びながら」、家庭と仕事とどちらもがあって自分やこれからの婦人も生かされるのだという動かぬ信念を抱いていたと平塚は回想している（Ⅲ：79）。そして、1924（大正13）年にこの当時を振り返り、自分の母としての生活を「子どもに対する愛と個人としてのわたくし自身の要求との間の絶え間ない相克と、それにかままる生活難との戦いであった」と述べている（4：23-6）。長女や長男も2階の母の書斎に通じる階段で遊びながら母を待っていたこと、階段をのぼった後に「ここは仕事をするとところだから下に行ってなさい」と母にたしなめられたことが悲しかったことを、平塚の孫たちに語っている（奥村2011：129,134）。

## 結 語

以上のように平塚のロマンチック・ラブと近代家族に関する思想と実践、そこにおける葛藤とゆらぎをみてきた。この葛藤とゆらぎは平塚が禅に傾倒すると同時に、性科学やエレン・ケイの恋愛至上主義などの西洋思想と出会うことによって生じたものといえる。本稿は特に恋愛、結婚、家族に関わる思想や行動における平塚の葛藤やゆらぎを確認してきた。文士森田草平との心中未遂事件、『青鞥』創刊を経て、次第に平塚は恋愛による「女性の解放」を謳うようになる。しかしながら、同時に、国民化、母性の強調による抑圧性をもった主張をすることによって、「女性の解放」に関して矛盾をきたしていった。その時期はまさに日本近代史の過渡的な時期であった。しかも、この過渡期に日本国家は、大きな変容の中で諸外国との軋轢を意識しはじめ、西欧並みの近代化と国粋主義に向かうという、矛盾を抱えていた。近代日本国家とそこに生きた平塚が同時期に過渡期における矛盾を抱えたのは偶然ではなく、必然であったといえる。

このような平塚の葛藤とゆらぎの素描から得た二点の考察を以下に示す。第一にロマンチック・ラブの思想と実践、そこにおける葛藤とゆらぎから、平塚が禅的な宗教的情調でもある「主客一致」を重視する立場から、近代的主体を重視する立場へと変化していったことである。そして、第二に、平塚の生育家族も事実婚後の家族も、新旧、和洋の価値観が相互に関連し合いながら形成された折衷的な「日本型近代家族」であったことである。

まず、第一の考察について述べる。煤煙事件の頃は接吻に「主客一致」を求めた平塚が、初体験の際には性の自己決定の意識への興味といった、いわば「主」の方に目が向き主体確立を自覚しはじめたことは注目に値する。さらに、平塚が傾倒していたケイは、主体の中の精神と肉体を分離して考えるキリスト教的思考を批判し、性欲を肯定する「霊肉一致」の恋愛を提唱していた。ここから平塚が客体から目をそらし、主体における精神と肉体の一致の重要性を基盤として「処女性」を賛美していたことがわかる。また、尾竹紅吉との同性愛についての語りでは、男装の尾竹に「少年よ」と呼びかけ、「同性の恋」について真剣に考える平塚から、近代的な性言説によって尾竹を病理化する平塚へという思想の転換を読み取ることができた。さらに、晩年に尾竹との関係を「同性愛」ではなく「異性愛」だと意味づけていたことから、平塚の同性愛への葛藤とゆらぎをみいだすことができる。事実婚についてみると、親に宛てた私信の公表から、煤煙事件以降、自分の個人的な行為が社会に波紋をきたすような近代的主体になりつつあることを、平塚が自覚していたことがわかる。平塚の奥村との共同生活の実践は、性愛関係における女性の主体性を示した。その実践は西欧からやってきたケイの思想を道徳とし、その道徳に従属した実践であるともいえる。平塚は法的制度に不満を持ち、その制度に抵抗するように奥村との共同生活を選んだ。しかし、その何年か

後、母性保護論争などで議論するなかで、平塚は国家に対して結婚を制限するような新たな制度を求めるといふように、矛盾をきたしていった。つまり、大正期に平塚が示した近代的主体は、その地位を確固たるものにするために国家の後ろ盾を求めていたのである。

第二の考察について述べる。生育家族における思想やその実践から、単純に「近代的」、「前近代的」と位置づけられない家族にまつわる思想や実践が幼少期の平塚を取り巻いていたことがわかる。新旧と和洋の混在と転換は、平塚家の人々の葛藤や揺れを引き起こしていた。しかし、平塚家の家族に関わる思想と実践は、一貫性がなくバラバラだったというよりも、新旧、和洋が相互に補足し合い連関し合って形成されていたといえる。さらに、この混在と転換から単に平塚の思想と実践が「近代的」だと位置づけられないこと、またこの混在と転換が平塚の葛藤とゆらぎを生み出していったことを示唆できる。また、欧化主義によって西欧を吸収して家族を近代化することに成功した父定二郎にとって平塚家は、「復古調」といいながらも「前近代型」家族の再興ではなく、「日本型近代」家族像を完成させたものだといえるだろう。つまり、欧化主義をたどった後に復古調に傾倒した父は、妻や平塚たちに「日本型近代」の思想と実践を強制ではなく、家庭的な父への追従として請け負わせることに成功したともいえる。

事実婚後の家族についてみると、平塚は妊娠、出産、母の経験をとおして「個人としての自分と母としての自分」との、母性重視の思想とそれに添えない実情との間で、葛藤を抱き、ゆれ続けていたのである。母が働き生計を支える姿は近代的というより現代的な母親像に見える。しかし、幼い子どもと働かない自由気ままな夫を抱えながら、生活苦をのりこえようとする平塚の姿は、明治維新後に生計の道を失った武士たちを支えた彼らの妻にも、母や妹と死病の父を抱えながら勤労と勉学に務め続けた父定二郎にも重ねることができる。ただし、武士の妻も定二郎も「個人としての自分」や「家庭における子どもへの愛」との間で葛藤することはなかったであろう。

本誌の青木論文にあるように、カルティニと比較すると、彼女と平塚の思想と実践は、同時代の世界的な潮流である、‘New Women’の思想に呼応したものである。しかし、同時にカルティニと平塚の置かれた立場、インドネシアと日本の国際的位置づけ、近代との呼応の仕方の違いによって、それぞれ異なる側面があることがわかる。本稿は、平塚が禅の影響と西欧的思想の影響の間をゆらぎ、葛藤する姿から、単純化できない日本の近代化の様相を示した。

#### 注

- 1) 平塚が立ち上げた『青鞥』が文芸誌から女性解放を主張する雑誌に変化したこと、34歳になる1929(大正9)年に新婦人協会の結成を経て女性の政治的権利のために運動を開始したことから、女性運動家と称されるようになる。60代をむかえた戦後には反戦平和運動、婦人運動に従事し、1953(昭和28)年に67歳で全日本婦人団体連合会を結成、初代会長に、76歳になる1962(昭和37)年には日本婦人の会結成、代表委員となる。
- 2) 『平塚らいてう著作集』からの引用については、『著作集1』などと略記、また引用出典では「1」、「2」と表記する。また、『元始、女性は太陽であった』の上巻を『自伝(上)』、下巻を『自伝(下)』、続編を『自伝(Ⅲ)』(文庫版)、完結編を『自伝(Ⅳ)』(文庫版)と略記、また引用出典では「上」、「下」、「Ⅲ」、「Ⅳ」と表記する。
- 3) この頃好んで読んでいたものについては、スピノザの神観、エクハルト、ヘーゲル(上:154)、桑木巖翼「哲学概論」、「西洋哲学史概説」、大西祝「西洋哲学史」、丘浅次郎「進化論講話」、「聖書」、ルナン「基督伝」、ダンテ「神曲」、バンヤン「天路歷程」、ミルトン「失樂園」、他に機関紙は「六合雑誌」、本郷教会「新人」、「丁酉倫理講演集」、「哲学雑誌」などであり、これらの雑誌では特に綱島梁川(りょうせ



- ん)、井上哲次郎、高山樗牛などの諸論文などを好んで読んでいた。またニーチェやショウペンハウアーなども読んでいた(上:156-7)。
- 4) 山本によれば、平塚が評論を『青鞥』に掲載している近代演劇の戯曲は、ヘンリック・イブセン(1828-1906)の『人形の家』(1879)や『ヘッダ・ガブラー』(1890)、ハーマン・ズダーマン(1857-1928)作『故郷』(1893)などである。これらの作品は、ヒロインが女性としての新しい生き方を模索しようとする、「新しい女」のモデルを投影できるようなものである。ただし、平塚はこれらのヒロインにあくまで批判的な態度で批評している。それは、「私は人間です」と吐く『人形の家』のノラに対して、他の評者は「婦人問題」の道標をみたにもかかわらず、「まだあなたは人間になったのではありません」と切り捨て、「自己の心霊上の悲劇」に直面した時に人間だと自覚すると論ずるような態度だった(山本1999:143-8)。ここからも、臨濟禅という宗教的伝統に根ざした視界から西洋戯曲を眺めて批評を投げかけていることがわかる。
- 5) ウォードは女性の能力を伸ばすことで男女平等が実現し、その結果「母の愛の力」はなお一層強大な活躍が出来ると主張する。また、『性的特徴』のなかで、エリスが将来の希望は男性的要素と女性的要素とともに発展させ、母となることが罪悪視されないような社会になることであると主張する。この主張に平塚は共感したようだ(山本1999:149-58)。
- 6) 山中を徘徊中に二人の行方を捜索していた巡査に保護されたため、また「僕は意気地のない人間なのだ」と言っただけで森田が心中をあきらめたことにより、心中は未遂に終わったのである(上:236-8)。「塩原事件」と称されるこの事件は、森田が翌年から『東京朝日新聞』で連載した小説「煤煙」から「煤煙事件」と呼称されるようになる。自伝で平塚が「塩原事件」の呼称をとっているのは、平塚にとってこの小説が「あれほど自分の趣味や嗜好で、また自分よがりの勝手な解釈」(上:272)でしかなかったからであろう。この事件は新聞で取り沙汰された。その理由は、平塚が官吏の令嬢であり、さらに女性が唯一入学することができた日本女子大学の卒業生であったこと、そして相手が文学士の森田であったからである。
- 7) 尾竹が広告をとるために訪れたバーで「五色の酒」つまりカクテルに魅せられたことを記事にした。この記事が、新聞紙上に「青鞥社の女は五色の酒を飲むもの」とおもしろおかしく書き立てられた。また、尾竹の叔父が不幸な女性の問題について取材するために吉原の花魁への取材をお膳立てし、平塚、尾竹らが出掛けた。しかし、それも「女文士の吉原遊び」とゴシップになってしまい、青鞥社内外から非難、批判が起こった(米田・池田編1999:238-9)。
- 8) たとえば、「結婚の第一条件は恋愛であること、またあらねばならぬこと、相互に恋愛なき結婚はたとえ他のいかなる条件において欠くところがないにしても、それは恋愛を結婚の道徳的基礎とする新道徳の見地からいえば最も醜悪にして、恥ずべき行為として非難されなければならぬ」(3:5)とした。
- 9) ケイの恋愛の自由は「新しい生命を創り出す」という目的のために、高齢者や大きな年齢差のある恋愛結婚を禁じようとして提言する(Key1903=1973:153)。つまり、「種族に不利な条件下における生殖の自由制限」(Key1903=1973:162)を求めていたのである。平塚らいてうと山田わかはこのようなケイの思想に傾倒しており、恋愛結婚が優良な種族の保存や向上を目的とすることで国民の幸福が得られると考えていた。
- 10) たとえば、平塚(1918)は「結婚の道徳的基礎」において、恋愛と生殖「個人の絶対的自由」は「生殖の行為を含む結婚においては、来るべき子供ということによってそこに種々なる制限がおかれなければなりません」と述べる。そして「アルコール中毒者」、「梅毒」や「てんかん病者」、「精神病者」の人々を「健康な子どもを得る見込みのない人」と位置づけ、彼らの「恋愛はとうてい結婚に導く権利をもちません」とするのである(3:18)。また、「花柳病男子結婚制限法制定に関する請願運動」(1920)で、らいてうが中心となる新婦人協会は花柳病、すなわち性病を患っている男子の結婚を制限する法律の制定を求めて、以下の項目を請願事項として貴族院に提出したことを述べている。花柳病にかかっている男子は結婚してはいけない。結婚をする前に男子は医師の診断を受けて花柳病でないことを明らかにする。花柳病にかかった夫と離婚できる権利の請求。妻に夫から花柳病が感染した場合は、夫が生活費、治療費を負担し、慰謝料を払う。これらのことを請願した(3:173)。
- 11) 1883(明治16)年に生まれた最初の子である長女は夭折し、その後1885(明治18)年に孝がうまれた。
- 12) ケイは、「性を否定し女子を男子化」するような「経済的自立」を説く議論を批判し、産む性である「女性としての権利を解放」しようとする「母性保護」を主張する。平塚はこの主張に賛同していくようになる(2:106-16)。

## 参考文献

- 井出文字, 1987, 『平塚らいてう——近代と神秘』新潮社。
- 奥村直史, 2011, 『平塚らいてう——孫が語る素顔』平凡社。
- 桑原桃音, 2006, 「『新しい女』の恋愛結婚観にみるジェンダー形式——1910年代から1920年代の論争言説に焦点をあてて」『龍谷大学大学院紀要-社会学, 社会福祉学』13:17-36。
- Key, Ellen Karolina Sofia, 1903, *Kärleken och äktenskapet: livslinjer.* = 1973, 小野寺信・小野寺百合子(訳), 『恋愛と結婚』上・下, 岩波文庫。
- 小林登美枝, 1977, 『平塚らいてう——愛と反逆の青春』大月書店。
- 小林登美枝編, 1987, 『『青鞥』セレクション——「新しい女」の誕生』人文書院。
- 佐々木英昭, 1994, 『『新しい女』の到来——平塚らいてうと漱石』名古屋大学出版会。
- 芝原拓自, 1980, 「近代天皇制国家の確立」高橋幸八郎・永原慶二・大石嘉一郎編『日本近代史要説』東京大学出版会:197-214。
- 平塚らいてう, 1912, 「円窓より——茅ヶ崎へ, 茅ヶ崎へ」『青鞥』2(8):76-108。
- 平塚らいてう, 1971, 『元始, 女性は太陽であった上・下巻——平塚らいてう自伝』大月書店。
- 平塚らいてう, [1971] 1992, 『元始, 女性は太陽であったⅢ・Ⅳ——平塚らいてう自伝』(文庫版)大月書店。
- 平塚らいてう, 1983, 『平塚らいてう著作集』第1~3巻, 補巻, 大月書店。
- 米田佐代子・池田恵美子編, 1999, 『『青鞥』を学ぶ人のために』世界思想社。
- 米田佐代子, 2002, 『平塚らいてう——近代日本のデモクラシーとジェンダー』吉川弘文館。
- 山本博子, 1999, 「『青鞥』における西洋思想の受容」米田佐代子・池田恵美子編『『青鞥』を学ぶ人のために』世界思想社:142-58。
- らいてう研究会, 2001, 『『青鞥』人物事典——110人の群像』大修館書店。
- 渡辺みえこ, 1998, 「『青鞥』におけるレズビアニズム」日本文学協会 新・フェミニズム批評の会『『青鞥』を読む——Blue stocking』學藝書林:269-84。